

きく ち ふみ とし 菊 地 史 倫

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 341 号
学位授与年月日	平成22年 3 月25日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期 3 年の課程) 人間科学専攻
学位論文題目	嘘の目的達成に関する感情心理学的研究
論文審査委員	(主査) 教授 行場 次朗 教授 仁平 義明 教授 大淵 憲一 教授 戸島 貴代志 准教授 阿部 恒之 准教授 辻本 昌弘

論文内容の要旨

本論文では、人は少なくとも 1 日に 1 回以上は嘘をつくという嘘使用の日常性 (DePaulo et al., 1996; 村井, 2000a) に着目し、日常的な嘘の多くは不利益回避を目的とした利他性の動機に基づく嘘 (社会的潤滑油としての嘘) と不利益回避を目的とした利己性の動機に基づく嘘 (弁解としての嘘) であることから、これらの嘘を検討対象とした。また、これらの嘘が聞き手のどのような心的機構に影響を与えることで不利益回避という目的を達成しているかを明らかにするために感情心理学的な観点から検討を行った。

第 1 章 嘘の心理学的研究の概観と本論文の課題

第 1 章では、嘘がコミュニケーションの中で使用されることから、嘘に関わる立場 (話し手と聞き手) を明確に区別して検討する必要性を確認した。また一般的コミュニケーション理論であるコード・モデル (Shanon & Weaver, 1949)、推論モデル (Grice, 1975)、関連性理論 (Sperber & Wilson, 1995) を概観することで、情報伝達にはメッセージの明示的内容 (言語情報) を解読する経路と、その情報に付随する非明示的内容 (含意) を推論する経路があることを確認した。

人は、一般的なコミュニケーションで伝達されるメッセージを基本的に真実として捉える傾向がある (Gilbert, 1991)。そのため、メッセージ伝達における上記の 2 つの経路は、メッセージが真実であることを前提としたものと考えられる。本論文ではコミュニケーションにおいて使用される「嘘」を検討対

象としているが、聞き手に嘘を検出されない限り、嘘は「真実」として聞き手に処理される。ここから、話し手のメッセージが嘘であるときも、真実であるときと同様に2つの経路からメッセージの伝達が行われていると考えられる。そこで、本論文では、話し手のメッセージが「嘘」であった場合にも同様の情報伝達経路が想定可能であり、言語情報の解読の後には信憑性の推論が行われる第一経路と、目的達成に関連性の高い含意（認知）の推論により聞き手の感情調整が行われることで目的を達成する第二経路を想定した「嘘の目的達成モデル」を提案した。以下、このモデルについて説明を加える。

一般的なコミュニケーションにおいて伝達されるメッセージの大半は真実である。真実メッセージの明示的内容である言語情報の信憑性は基本的に高いために、言語情報に対して信憑性の推論が行われていることはほとんど意識されていないと考えられる。言語情報の信憑性は、空気や健康と同様に満たされている状態ではほとんど意識されない。しかし、信憑性の評価が損なわれて初めてその存在を意識するものだと考えられる。たとえば、寝坊して大学の講義に遅刻した人が遅刻理由として「祖母が急に倒れてしまって…」という嘘をついたとする。そのとき、聞き手である先生は「学生は急に倒れた祖母の対処のために遅刻した」という明示的内容を言語情報として解読するだろう。そして、この解読の後に「何だか嘘らしいな」という信憑性の推論が行われていると考えられる。多くの研究 (e.g., Buller & Burgoon, 1996; Levine & McCornack, 2001) から発話の信憑性が低く評価された場合には、嘘の聞き手に疑惑や懸念を生じさせ、嘘を検出するための探索行動が増加することが報告されている。相手の探索行動が増加した場合には、話し手の嘘は相手に検出されてしまうリスクが高まる (Levine & McCornack, 2001)。そのため、発話の信憑性は聞き手に嘘が露見する可能性と強い関連性があり、信憑性が低い場合には嘘が露見する可能性が高まると考えられる。したがって、第一経路において嘘の信憑性は相手に嘘が露見しないようにする防波堤として機能していると考えられる。

人は嘘をつくことで何らかの目的を達成しようとしている。本論文では、特に不利益の回避を目的とする社会的潤滑油としての嘘と弁解としての嘘に着目した。本論文の検討対象とする嘘においては、話し手は嘘メッセージを聞き手に伝達することで不利益を回避しようとして試みている。それでは、聞き手がどのように嘘メッセージを処理することで、不利益の回避という目的が達成されると話し手は考えているのだろうか。この点を考えるときに Weiner (2006) の社会的行為に関する理論が援用できる。Weiner は社会的動機付けや正義の概念システムが先行事象、認知的評価（原因・原因の性質・責任）、感情、行動的反応によって理論的に説明できることを主張している。認知・感情・行動には密接な関係があると考えられ、嘘の話し手も嘘メッセージを伝達することで聞き手の認知・感情・行動システムに影響を及ぼそうとしている可能性が高い。つまり、話し手は嘘メッセージから推論される含意（これは Weiner の理論の認知に当たると考えられる）によって嘘の聞き手の感情を調整し、不利益回避という目的を達成していると考えられる。たとえば、寝坊のために遅刻した人が遅刻理由として「乗っていたバスが事故を起こしてしまった」という弁解としての嘘をついたとする。嘘の聞き手は関連性の原理に基づいて出来事の重大性や責任性などの遅刻理由に関連性の高い認知（含意）を自動的に推論するだろう。つまり、嘘メッセージを伝達された聞き手は、乗っていたバスが事故を起こしたならば話し手が大変な出来事に巻き込まれ、遅刻に対する責任もないと推論してしまうということである。また、この推論の結果から嘘の聞き手の感情が調整されると考えられる。通常、相手が寝坊して遅刻してきた場合には、待たされたことに対して非常にネガティブな感情が生起する。しかし、「乗っていたバスが事故を起こしてしまった」という嘘から推論される重大性や責任性などの認知は聞き手のネガティブ感情を抑制するという感情調整を行うと考えられる。そして、ネガティブ感情が抑制されることで、嘘の聞き手は遅刻をゆるし、遅刻に対する非難もしないことになると考えられる。このように、第二経路において

嘘メッセージは不利益回避という目的達成に関連性の高い認知を聞き手に推論させ、その認知が聞き手の感情を調整することで、話し手は目的を達成していると考えられる。

本論文では次章以降で示される実証的な検討によって、この「嘘の目的達成モデル」の妥当性を検証する。また、このモデル検証において得られた知見から、嘘の目的達成における最も重要な要因を提案する。

第2章 社会的潤滑油としての嘘の検討

第2章では、嘘に関わる立場（話し手・聞き手）を区別し、社会的潤滑油としての嘘を対象として第1章で提案した嘘の目的達成モデルの妥当性について検討を行った。本論文において想定したモデルから、第一経路は信憑性を高めることにより嘘の露見を防ぐことで間接的に目的達成に寄与し、第二経路は聞き手の認知に影響を与えることで感情調整を行うといった心的機構により直接的に目的達成に寄与していることを予測した。

研究1（嘘の話し手の立場）の検討は質問紙実験により行い、実験参加者は仮想的な状況で嘘をつくシナリオを読み、嘘に対する様々な判断を行った。その結果、社会的潤滑油としての嘘は基本的に相手にとって望ましい内容になるという特性から予測されるように、話し手は嘘の内容に関わらず信憑性が高く評価されると想定していた。また他の予測も支持され、嘘の話し手における想定モデルでは聞き手の認知（被配慮の認知）に影響を与えることで、感情（ネガティブ感情・ポジティブ感情）の調整を行い、不利益（言い争い）を回避できることが示された。さらに、本研究で予測していなかったが、嘘の話し手における想定モデルでは第一経路の信憑性の評価の高さが第二経路の認知・感情（ネガティブ感情、ポジティブ感情）・不利益の回避に対して正の効果を持ち、目的達成に対して望ましい方向の影響を与えていることが示された。

研究2（嘘の聞き手の立場）の検討も質問紙実験により行い、実験参加者は仮想的な状況で嘘をつかれるシナリオを読み、嘘に対する様々な判断を行った。その結果、研究1と同様に嘘の内容に関わらず信憑性は高く評価されていた。また、予測は支持され、社会的潤滑油としての嘘は聞き手の認知（被配慮の認知・表現の厳しさの認知）に影響を与え、感情（ネガティブ感情・ポジティブ感情）を調整し、不利益（制裁行動）の回避という目的を達成していることが示された。さらに研究1と同様に、第一経路の信憑性の評価の高さも第二経路の認知（被配慮、表現の厳しさ）・感情（ネガティブ感情、ポジティブ感情）・不利益（制裁行動）の回避に対して正の効果を持ち、目的達成に対して望ましい方向の影響を与えていることが示された。

以上の結果から、嘘に関わる立場に関係なく社会的潤滑油としての嘘の目的達成モデルの妥当性が示された。

第3章 弁解としての嘘の検討

第3章では、嘘に関わる立場を区別し、弁解としての嘘を検討対象として嘘の目的達成モデルの妥当性について検討を行った。第2章と同様に本論文において想定したモデルから、第一経路は信憑性を高めることにより嘘の露見を防ぐことで間接的に目的達成に寄与し、第二経路は聞き手の認知に影響を与えることで感情調整を行うといった心的機構により直接的に目的達成に寄与していることを予測した。

研究3（嘘の話し手の立場）の検討は質問紙実験により行い、実験参加者は仮想的な状況で嘘をつくシナリオを読み、嘘に対する様々な判断を行った。その結果、弁解としての嘘は基本的に話し手に原因のあるネガティブな出来事に対する釈明となるという特性から予測されたように、嘘の内容によって信

憑性の評価は異なると話し手に想定されていた。また、他の予測も支持され、嘘の話し手における想定モデルでは聞き手の認知（責任性の認知）に影響を与えることで感情（怒り）の調整を行い、不利益（遅刻に対するゆるしの喪失）を回避できることが示された。さらに、本論文で予測していなかったが、嘘の話し手における想定モデルでは第一経路の信憑性の評価の高さが第二経路の認知（責任性）・感情（怒り）・不利益（遅刻に対するゆるしの喪失）の回避に対して正の効果を持ち、目的達成に対して望ましい方向の影響を与えていることが示された。

研究4（嘘の聞き手の立場）の検討も質問紙実験により行い、実験参加者は仮想的な状況で嘘をつかれるシナリオを読み、嘘に対する様々な判断を行った。その結果、嘘の内容によって信憑性の評価は異なっていた。また、予測は支持され、弁解としての嘘は聞き手の感情（怒り）を調整し、不利益（遅刻に対するゆるしの喪失）の回避という目的を達成していることが示された。さらに研究3と同様に、第一経路の信憑性の評価の高さが第二経路の感情（怒り）・不利益（遅刻に対するゆるしの喪失）の回避に対して正の効果を持ち、目的達成に対して望ましい方向の影響を与えていることが示された。

以上の結果から嘘に関わる立場に関係なく、弁解としての嘘の目的達成モデルの妥当性が概ね示された。ただし、研究4（嘘の聞き手の立場）において責任性の認知を検討していなかったという問題があり、責任性の認知に影響を与えると考えられる統制可能性の認知を新たに検討対象とするため、嘘に関わる立場を区別した弁解としての嘘の目的達成モデルについて第4章で改めて検討を行った。

第4章 嘘の露見の検討

第4章では第3章の結果を踏まえ、嘘に関わる立場を区別し、弁解としての嘘を検討対象として嘘の目的達成モデルの妥当性について改めて検討を行った。予測は第3章と同様であった。また、嘘の目的達成モデルの成立を阻害する要因として、聞き手に嘘が検出されてしまうという嘘の露見が考えられる。第4章では嘘の露見がこのモデルに与える影響について合わせて検討した。

研究5（嘘の話し手の立場）の検討は質問紙実験により行い、実験参加者は仮想的な状況で嘘をつくシナリオを読み、嘘に対する様々な判断を行った。その結果、研究3と同様に予測は支持され、嘘の話し手における想定モデルでは嘘が露見する前には聞き手の認知（統制可能性の認知・責任性の認知）に影響を与えることで、感情（怒り）の調整を行い、不利益（遅刻に対するゆるしの喪失・制裁行動）を回避できることが示された。さらに研究3と同様に、嘘の話し手における想定モデルでは第一経路の信憑性の高さが第二経路の認知（責任性）・感情（怒り）・不利益（遅刻に対するゆるしの喪失・制裁行動）の回避に対して正の効果を持ち、目的達成に対して望ましい方向の影響を与えていることが示された。しかし、嘘が露見した後は、嘘をつくことで推論させる認知が意味を持たなくなり、聞き手の感情調整が行われずに、話し手は不利益を回避できなくなっていた。また、嘘の話し手における想定モデルでは聞き手が嘘をつかれたことに対してネガティブな感情を生起し、不利益回避に関する判断や行動に負の効果を与えていた。したがって、嘘が露見する前に成立していた嘘の目的達成モデルは、嘘が露見することで阻害されると嘘の話し手に想定されていることが示された。

研究6（嘘の聞き手の立場）の検討も質問紙実験により行い、実験参加者は仮想的な状況で嘘をつかれるシナリオを読み、嘘に対する様々な判断を行った。その結果、研究4と同様に予測は支持され、嘘が露見する前には弁解としての嘘が聞き手の認知（統制可能性の認知・責任性の認知）に影響を与え、感情（怒り）を調整し、不利益（遅刻をゆるしの喪失・制裁行動）の回避という目的を達成していることが示された。さらに研究4と同様に、第一経路の信憑性の評価の高さが第二経路の認知（責任性）・感情（怒り）・不利益（遅刻に対するゆるしの喪失・制裁行動）の回避に対して正の効果を持ち、目的

達成に対して望ましい方向の影響を与えていることが示された。しかし、嘘が露見した後は、推論された認知が意味を持たなくなり、聞き手の感情調整が行われずに話し手は不利益を回避できなくなっていた。また、嘘の聞き手は嘘をつかれたことに対してネガティブな感情を生起し、不利益回避に関する判断や行動に負の効果を与えていた。したがって、研究5と同様に嘘が露見する前に成立していた嘘の目的達成モデルは、嘘が露見することで阻害されることが示された。

以上の結果から嘘に関わる立場に関係なく、弁解としての嘘の目的達成モデルの妥当性が改めて示された。また、嘘に関わる立場に関係なく、嘘の露見はこの目的達成モデルの成立を阻害することが示された。

第5章 欺瞞的ユーモアの検討

第5章では欺瞞的ユーモアの目的達成モデルに妥当性について検討を行った。欺瞞的ユーモアは一種の弁解としての嘘であるが、一般的なものとは異なり、聞き手の「おもしろさ」の認知を高めることによって不利益回避を目指した嘘である。第5章では、嘘に関わる立場を区別した欺瞞的ユーモアの目的達成モデルについて検討を行った。欺瞞的ユーモアの場合、第一経路の信憑性は重視されないため目的達成に関与せず、第二経路は聞き手の認知に影響を与えることで感情調整を行うといった心的機構により直接的に目的達成に寄与していることを予測した。

研究7（嘘の話し手の立場）の検討は質問紙実験により行い、実験参加者は仮想的な状況で欺瞞的ユーモアを伝えるシナリオを読み、欺瞞的ユーモアに対する様々な判断を行った。その結果、予測と合致し信憑性はかなり低く評価されると話し手に想定されていた。また、他の予測も支持され、嘘の話し手における想定モデルでは聞き手の認知（おもしろさの認知・責任性の認知）に影響を与えることで感情（ネガティブ感情・ポジティブ感情）の調整を行い、不利益（遅刻に対するゆるしの喪失・制裁行動）を回避できることが示された。さらに、本研究で予測していなかったが、嘘の話し手における想定モデルでは第一経路の信憑性の評価の高さが第二経路の認知（おもしろさ）・感情（ネガティブ感情・ポジティブ感情）・不利益（遅刻に対するゆるしの喪失・制裁行動）の回避に対して正の効果を持ち、目的達成に対して望ましい方向の影響を与えていることが示された。

研究8（嘘の聞き手の立場）の検討も質問紙実験により行い、実験参加者は仮想的な状況で欺瞞的ユーモアを伝えられるシナリオを読み、嘘に対する様々な判断を行った。その結果、研究7と同様に欺瞞的ユーモアの信憑性はかなり低く評価された。また、研究7と同様に予測は支持され、欺瞞的ユーモアは聞き手の認知（おもしろさの認知・責任性の認知）に影響を与えることで感情（ネガティブ感情・ポジティブ感情）を調整し、不利益（遅刻に対するゆるしの喪失・制裁行動）の回避という目的を達成していることが示された。研究7で示された第一経路の信憑性の評価の高さの影響は第二経路の感情のみに見られたが、非常に弱い影響であった。

以上の結果から嘘に関わる立場に関係なく、欺瞞的ユーモアの目的達成モデルの妥当性が示された。

第6章 総合的考察

第6章では、各章で行われた質問紙実験による研究の知見を整理し、第1章で提案した「嘘の目的達成モデル」の妥当性の検証と、このモデル検証において得られた知見から嘘の目的達成における最も重要な要因について総合的に考察した。

本論文で提案した嘘の目的達成モデルは2つの経路から構成され、第一経路は信憑性を高めることにより嘘の露見を防ぐことで間接的に目的達成に寄与することを予測した。第2章の社会的潤滑油として

の嘘、第3章及び第4章の弁解としての嘘、第5章の一種の弁解としての嘘である欺瞞的ユーモアの検討から得られた知見を考慮すると、第一経路の信憑性の評価は嘘の露見を防ぐ機能を担い、嘘の種類によってある程度その評価の水準は規定されると結論づけられた。ただし嘘の種類によって信憑性の評価が全て規定されるわけではなく、弁解としての嘘のように内容によって信憑性の評価が大きく変化することもあるが、弁解としての嘘は初期値の信憑性が低く評価されると考えられるため、嘘の種類によって得られる信憑性の評価は基本的に規定されていると言える。また、第4章で検討した嘘の露見は目的達成の成立を阻害するという知見と、第5章で検討した欺瞞的ユーモアの信憑性はかなり低く評価されるがおもしろさの認知を高めることができれば不利益を回避できるという知見から、嘘の目的達成モデルが成立する前提は聞き手に嘘が露見しないことが前提となり、第一経路の信憑性の評価を高める以外にも嘘の露見を防ぐ方法があることが結論づけられた。また、第2章から第5章の知見から第一経路の信憑性の評価は第二経路の認知・感情・不利益回避の判断や行動に対して正の効果を持ち、目的達成に対して望ましい方向の直接的な影響を与えることが示された。本論文では、第一経路の信憑性は嘘の露見を防ぐ機能を担うことで間接的に目的達成に影響を持っていると想定していたが、直接的な影響を持つことがこれらの結果から示された。この点に関して、O'Sullivan (2003) は信用性の欠ける印象を与える人は嘘をついていると判断されやすいことを示しており、Tyler, Feldman, & Reichert (2006) は嘘が確実に露見しない曖昧な状況においても、嘘の話し手の発話に対して信憑性が低く評価された場合には、話し手に対する信頼性の評価が低くなり、印象が悪くなることを示している。これらの知見が示すように、聞き手に確実に嘘が露見しない場合にも話し手の発話の信憑性が低く評価される場合には、相手から嘘をつかれているかもしれないという懸念が生じ、発言が実際に嘘だったときのことを考慮して、全体的な目的達成の効果が低くなってしまいう現象が本論文の結果に反映された可能性がある。

本論文における嘘の目的達成モデルにおける第二経路は聞き手の認知に影響を与えることで感情調整を行う心的機構により直接的に目的達成に寄与していることを予測した。そして、第2章の社会的潤滑油としての嘘、第3章及び第4章の弁解としての嘘、第5章の欺瞞的ユーモアの検討において、嘘に関わる立場に関係なく、目的達成に関連性の高い認知を推論させることで感情を調整し、不利益回避に関する行動を望ましい方向に変化させることができることが示された。ここでは、嘘の種類によって聞き手に推論される認知は異なっていたが「目的達成に関連性の高い」認知という点は共通していたと言える。したがって、嘘の種類や嘘に関わる立場に関係なく聞き手の認知と感情という一連の心的機構が不利益回避に関する判断や行動に影響を与えることが共通していると結論づけられた。以上の知見から、本論文において嘘の目的達成モデルの妥当性が示されたと言える。次に、嘘の目的達成における最も重要な要因について考察する。

本論文の検討において、調整対象となる感情は嘘の種類によって異なっていたが、ネガティブ感情の生起を抑制しポジティブ感情の生起を促進するという感情の調整方向は一致しており、目的達成を示す不利益に関する判断や行動に直接的な強い影響を持っていた。怒りなどのネガティブ感情の生起は他者に対する攻撃行動などに結びつきやすいため、対人的な葛藤が生じる原因となる感情の一つである (Averill, 1983; Frijda, 1986)。そのため、葛藤などの不利益回避を目的とした嘘においては相手のネガティブ感情を抑制するという感情調整が重視されていた可能性がある。実際に、社会的潤滑油としての嘘や欺瞞的ユーモアにおいて不利益回避に関する判断や行動には、ポジティブ感情の促進よりもネガティブ感情の抑制が大きな影響を持っていた。ただし、ポジティブ感情の促進は対人コミュニケーションを円滑にする機能が含まれており (Shiota, Campos, Keltner, & Hertenstein, 2004)、遅刻に対するゆるしなどのポジティブな側面に対しては影響を与えていた。本論文では不利益回避というネガティブな

側面に着目した検討を行っていたが、対人印象の向上などのポジティブな側面についての検討の場合にはポジティブ感情がより大きな影響を持つ可能性がある。本論文の検討から、ネガティブ感情の抑制は、不利益回避における「遅刻に対するゆるし」などのポジティブな側面と「制裁行動」などのネガティブな側面に対して影響力を持ち、ポジティブ感情の生起は不利益回避における「遅刻に対するゆるし」などのポジティブな側面のみに影響を持つことを結論づけた。そして、本論文の検討から嘘の種類や嘘に関わる立場に関係なく、目的達成に直接的な強い影響を持つのは感情であることを結論づけた。感情と行動に強い関連性があることは釈明の一つである謝罪に関する研究（e.g., Ohbuchi, Kameda, & Agarie, 1989）や宥和行動に関する研究（e.g., Keltner & Anderson, 2000）においても示されている。

以上、本論文の知見を総合すると嘘の目的達成には、聞き手の信憑性を獲得することはもちろん重要だが、聞き手の認知を変容させることで最終的に相手の感情調整を行えるかどうかそれがそれ以上に重要な要因であると言える。

ただし、本論文では、話し手と聞き手の会話のやり取りなどの嘘を用いた言語的コミュニケーションではなく、単純な1回限りのメッセージ伝達におけるモデルを検討していたという問題がある。通常のコミュニケーションでは会話は一回で終わることは少なく、本論文で使用したような嘘をついた後に、聞き手はその嘘について色々なことを聞いてくると考えられる。実際に、Buller & Burgoon (1996)の対人欺瞞理論では話し手と聞き手の時系列的なやり取りの要因が考慮されている。言語的コミュニケーションにおいては1回きりの会話だけではなく、双方向的なやり取りを含んだ検討をする必要がある。ただし、時系列的な検討は要因の統制に困難があるという大きな問題があり、結局は細かい検討を重ねていく必要があると考えられるため、本論文で検証した1回限りの単純なメッセージ伝達におけるモデルの検討は基礎的な知見を積み上げる点において貢献していると考えられる。また、本論文では言語でのメッセージ伝達のみを検討してきたが、実際のコミュニケーションにおいては非言語的なメッセージ伝達も行われており、より複雑な過程を経て目的達成がなされていると考えられる。加えて、本論文ではモデル構築のために質問紙実験による検討のみを行っていたが、シナリオ法による質問紙実験は参加者の想像力の程度に影響を受けやすく、また質問紙上の判断となるため、現実場面での判断とは乖離してしまう可能性がある。そのため、本論文で検討したモデルの実験室実験における結果の再現性についても検討する必要がある。実験室実験による検討では、前述した話し手と聞き手のコミュニケーションにおける時系列的な変化についても検討が可能であり、言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションの両面からも検討が可能という利点がある。このように、今後は質問紙実験による検討と実験室実験による検討を組み合わせるなど、嘘の目的達成における言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションの時系列的な要因を一つずつ検討していくことで、Buller & Burgoon (1996)が提唱したような嘘の目的達成に関する対人欺瞞理論の構築が可能となると考えられる。

論文審査結果の要旨

本論文は、日常的に使用される嘘の多くが社会的潤滑油としての嘘・弁解としての嘘であり、他者との葛藤などの不利益を回避するために使用されることに着目し、これらの嘘が聞き手の認知・感情に影響を及ぼすことによって不利益回避という目的を達成していることをシナリオ実験によって実証的に明らかにしたものである。

実験1・2では社会的潤滑油としての嘘の目的達成に関して検討を行った。その結果、嘘の話し手・

聞き手という立場に関係なく、嘘をつくことで被配慮の認知を変容させ、感情調整が行われることで、不利益を回避できると考えられていることが明らかになった。

実験3～6では弁解としての嘘の目的達成に関して検討を行った。その結果、嘘の話し手・聞き手という立場に関係なく、嘘をつくことで責任性の認知を変容させ、感情調整が行われることで、不利益を回避できると考えられていることが明らかになった。

実験5・6では相手に嘘をついたことが明らかになってしまった場合（嘘の露見）、それが弁解としての嘘の目的達成にどのような影響を与えるかに関して検討を行った。その結果、嘘の話し手・聞き手という立場に関係なく、嘘の露見により目的達成は阻害されることが明らかになった。

実験7・8では弁解としての嘘の一つである欺瞞的ユーモアの目的達成に関して検討を行った。その結果、嘘の話し手・聞き手という立場に関係なく、嘘をつくことで聞き手に「おもしろさ」を認知させて感情が調整されることで、不利益を回避できると考えられていることが明らかになった。

これらの研究から、嘘に関わる立場（話し手・聞き手）や嘘の種類（社会的潤滑油としての嘘・弁解としての嘘・欺瞞的ユーモア）の全てにおいて、嘘をつくことで達成される不利益を回避するという目的は、偽の情報が正しい情報として認知されるかどうかではなく、明示的な内容・非明示的な内容の認知を通じて感情が調整されることによって達成されていることが明らかになった。嘘をつくことは単なる道徳違反の避けるべき行為というだけでなく、相手の感情を調整し、対人葛藤を回避し、コミュニケーションを円滑にする方略として機能している側面をも有することが示された。

以上のように、本研究は嘘を用いたコミュニケーションにおける心理社会的機構について新たな知見を提供し、この分野の研究発展に貢献すること大である。よって、本論文の提出者は博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。